

平成24年度
第5回新川和江賞
～未来をひらく詩のコンクール～

と き:平成25年2月10日(日)

ところ:結城市民情報センター3階多目的ホール

ごあいさつ

結城市は伝統的な地場産業が根付いており、古くから受けつがれた文化も根付いている歴史と文化の街と言われております。

これを継承していくのは、未来を担う子供達です。「新川和江賞 未来をひらく詩のコンクール」も今年で5回目を迎えます。平成20年度に結城市民情報センターとゆうき図書館の開館5周年を記念する事業として、詩人である名誉市民新川和江先生の名を冠して、創設されました。

今年度の詩の応募に対しても、市内在学・在住の小・中・高校生を対象に募集いたしましたところ、1,775篇もの作品の応募をいただきました。これもひとえに関係者の皆様の深いご理解と詩を愛する気持ちの賜物と感謝いたしております。

詩の創作活動を通じて、本市の文芸振興を図り、積極的に未来に向かう創造性豊かな青少年の健全育成に寄与すること、郷土の新たな才能を発掘することを目的に開催をしております。

ご応募いただきました作品は毎年いずれも力作ぞろいで、選考には大変ご苦労されたと伺っております。受賞されました皆様には心よりお祝いを申し上げますとともに、残念ながら選に漏れました皆様も、今後ますます詩に関心を持たれ、来年も応募していただきますことを期待しております。

皆様が、詩の創作活動を通じて、個性豊かな創造力を育み、豊かな心で毎日を過ごされますことを願いごあいさついたします。

平成25年2月10日

結城市長 前場文夫

最終選考を終えて

このコンクールも、スタートしてから早や五年目。年ごとに応募数が多くなり、本年は 1,775 篇も寄せられて、事務局は連日嬉しい悲鳴のあげ通しでした。詩は決して強制的に書かせるものではなく、希望者だけに書いてもらってください、とあらかじめ学校側にもお願いしてありますので、自分も書いてみよう、と興味を示す生徒さんがふえてきた、ということなのでしょう。

私ひとりで全作品を読ませて頂くことは、老齢のこともあり、体力が及びませんので、結城在住の詩人やエッセイストに、予選をお願いしております。どこのコンクールでも、発表はしてありませんが、同じように鑑賞眼を備えた詩人たちや有識者の予選をへて、五分の一ほどに絞られ、最終選考委員の机上に運ばれるのです。新川和江賞は、結城市の小・中・高生を対象にしたコンクールですので、市民のみなさまにもご理解いただきたく、選考の経路を別記のようにガラス張りにいたしました。

さて、今回の最終選考では、高橋理貴斗さんの「すげ沼」と海老澤朋代さんの「日記詩」のどちらを最優秀に選ぶべきか、何日も悩みました。詩の専門誌であるなら、迷うことなく「すげ沼」を特選にします。題材の選び方にも表現にも、文学性が高いからです。けれどこのコンクールは、同世代の少年少女たちに元気を与えてくれる、はつらつとした詩を求めて出発したコンクールですので、「日記詩」のほうに最優秀賞をさし上げることにいたしました。

優秀賞は申すまでもなく、優良賞のほうにも、忘れがたい詩がいくつかありました。月が太陽の中央部をおおい、太陽の光が金の指輪のように見える金環食を、わずかなことばでみごとにとらえた宮田真由さんの「太陽」や、大好きなおじいちゃんが、どのようにかわいがってくださるかを、いくつも例をあげて書いた、えびさわまおさんの「だいすき」など、読者にもあたたかさが伝わってくる、心ゆたかな作品です。

賞に入らなくても、今日のあなた、今年のをあなたを、文字に書きとめて置くことに意義があるのですから、どうぞこれからも、飽きずに書きつづけていらしてください。

平成25年2月10日

新川和江

次 第

日時 平成25年2月10日(日)
午後2時より
場所 結城市民情報センター
3F多目的ホール

●オープニングセレモニー

新川和江氏作品 「花の名」の群読（優良賞 29名）

●表彰式

- 1 開式のことば
- 2 主催者あいさつ
- 3 来賓あいさつ
- 4 表彰
- 5 第5回受賞作品朗読 新川和江賞（1名）
優秀賞（7名）
優良賞（29名）
- 6 5周年記念
歴代新川和江賞受賞作品朗読（第1回～第4回）
- 7 新川和江氏による講評

●受賞者氏名

☆新川和江賞（最優秀賞）

にっ きうた
日記詩

結城南中学校 1年 海 老 澤 朋 代

☆優 秀 賞

たんぽぽ

結城小学校 1年 宮 田 昂 誠

妹

結城西小学校 4年 青 木 万 記

すげ沼

城南小学校 5年 高 橋 理 貴 斗

おんいづ

江川南小学校 6年 中 山 ゆ 衣

視線の先に～電車に乗って～

結城東中学校 1年 上 野 みず ほ 歩

親父の背中

結城南中学校 1年 赤 岩 りく と 人

真夏のショータイム

結城東中学校 3年 宮 田 うみ 海

☆優良賞

あかちゃんがうまれたよ

城西小学校 1年 山中^{やまなか} 博人^{ひろと}

スカイツリー

絹川小学校 1年 吉田^{よした} 映菜^{はな}

だいすき

山川小学校 2年 海老澤^{えびさわ} 磨緒^{まお}

ぼくのくつ

江川南小学校 2年 鈴木^{すずき} 颯汰^{そつた}

やもり

結城小学校 3年 岩田^{いわた} 彩花^{あやか}

回すと カシャ

城西小学校 3年 浅川^{あさかわ} 玉奈^{たまな}

春のおくりもの

山川小学校 3年 阿久井^{あくい} 美詩^{みう}

雲

山川小学校 4年 湯本^{ゆもと} 里奈^{りな}

かくれんぼ

江川北小学校 4年 濱野^{はまの} 竜綺^{たつき}

真っ白

結城小学校 5年 宮田^{みやた} 冴香^{さえか}

ゾエア

結城小学校 6年 秋田^{あきた} 翔平^{しょうへい}

本のとびら

結城西小学校 6年 渡部^{わたべ} 明里^{あかり}

自然の合唱

絹川小学校 6年 田村^{たむら} 歩久^{あゆひさ}

ゆきちゃん

江川北小学校 6年 石崎^{いしざき} 新菜^{にな}

海

江川南小学校 6年 小林^{こばやし} 千依^{ちより}

カブトムシ

結城中学校 1年 増田^{ますだ} 祥太^{しょうた}

荒れる海

結城中学校 1年 望月^{もちづき} 蛍汰^{けいた}

ぼくの生まれた日

結城東中学校 1年 伊藤^{いとう} 大翔^{ひろと}

化石

結城東中学校 1年 鶴見^{つるみ} 莉子^{りこ}

迷路

結城東中学校 1年 西塚^{にしづか} 美空^{みく}

太陽

結城東中学校 1年 宮田^{みやた} 真由^{まゆ}

人生の形

結城南中学校 1年 岩田^{いわた} 泉美^{いずみ}

地球

結城中学校 2年 稲葉^{いなば} 太我^{たいが}

風は運ぶ

結城南中学校 2年 照内^{てるうち} 裕哉^{ひろや}

緑の海

結城南中学校 2年 野村^{のむら} 美咲^{みさき}

「今」という幸せを

結城中学校 3年 井出^{いで} 真琴^{まこと}

アリから学んだこと

結城中学校 3年 野崎^{のざき} 絵理^{えり}

一期一会

結城南中学校 3年 渡邊^{わたなべ} 真由^{まゆ}

登山靴

結城第二高等学校 2年 木村^{きむら} 仁美^{ひとみ}

新川和江賞

日記詩
にっきうた

結城南中学校 一年 海老澤 朋代

ハンドルがかくりかくり
足もようやく地面に届く
ゴムバンドでつけた荷物
進むのにふらりふらり
四月 新しいクラスの人達
時間ばかりが気になる
五月 水田をぬける風にひんやり
点々とした小さな稲の子
六月 宇宙服みたいな雨具
カエルさん、おどろかないでね
七月 アスファルトの遠くの表面
ゆらゆら鏡は細く細く
八月 遠く遠くどこまでも広がる
あおい稲穂はきらきらゆれる
今までこんなに遠くまで
自転車に乗るのは初めて
いつてらっしゃいの門をぬけると
まるで違う別の世界
車輪の音と朝が始まる
旅をしている様な気持ちは
毎日に少しずつ
大切に重ねてゆく
私だけの
日記詩

短評 新川和江賞「日記詩」

にっきうた

中学生になり、自転車通学をするようになった明け暮れが、四月、五月、と書き綴られて行きます。最初はハンドルがかくりかくりと移り変わる道路沿いの風景も、眺める余裕が出来てきます。七月、行く手の路上にゆれるくゆるらゆら鏡くというのは、近づけば消えてしまいう逃げ水のことでしょう。一種の憂気楼しんきろうきわいな比喩。

種名の「日記詩」は海老澤さんの造語。詩の中にこういう部門を創り出すのは前向きな姿勢が、作品をほしうしうとせせてくれます。

優秀賞

たんぽぽ

結城小学校 一年 宮田 昂誠

ふあんでこわかった
がっこうからのかえりみち
なんどもなんどもあったね
まぶしいくらいいきいろのきみ

おそらにむかって
せすじを。بونとのばしているきみ
ほくもまねしてせすじを。ボン
みぎ ひだり みぎ あんぜんかくこん

どこにでもいるきみ
ふまれてもふまれてもおきあがるきみ
ほくもまねして
つかれてもころんでも
おきあがるよ

ほくもね
ほうしもランドセルカバーもきいろなんだ
ほくがにねんせいになったはる
またあおうね

短評 優秀賞「たんぽぽ」

〈まぶしいくらいいきいろのきみ〉とたんぽぽをよんだのは、
みやたくんがはじめてかもしれませんね。けっしてめずらしいは
なではなく、〈まぶしい〉もころねみくどすから、詩にするのは、か
えってむずかしい題材なのです。でもこの詩は、みやたくんが、
ともだちみだいにしたしみをこめてよびかけているので、よび入
りもきいろなんです。もしかしたらみやたくんも、たんぽぽ
のおなかまなのかも、しれませぬ。

優秀賞

妹

結城西小学校 四年 青木 万記

妹は、
ぼくが学校から帰って来るのを
一番にむかえてくれる。
いじわるして、そおっと帰っても
「にいに、おかえりい」
うれしそうにむかえてくれる。
少しはずかしいけど、すごくうれしい。
妹は、
ぼくの物を何でもほしが
えんぴつ、消しゴム、ノートに教科書
学校で使う物をとられると
ぼくは、こまるのに・・・
妹は、よくばりだ。
おかしを半分ずつに分けても
ぼくより先に食べ終わ
ぼくのおかしをほしが
でも、ぼくは、お兄ちゃんだから
半分分けてあげるんだ。
妹は、すぐじゃまをする。
ぼくが、勉強してても、ゲームをしてても
ぼくのじゃまばかり・・・
そして、すぐケンカ
でも、ぼくは、お兄ちゃんだから
先にあやまるんだ。
そんな元氣いっぱいいな妹だけ
ぼくは、妹が大好き。
ぼくは、お兄ちゃんだから
妹をまもってやるんだ。

短評 優秀賞「妹」

この詩の中で青木くんは、へぼくは、お兄ちゃんなのだからを
三回くり返しています。青木くんの心が目に見えるように、ほほ
えましいのに、なぜだか涙ぐんでしまいました。お兄ちゃんぶっ
ていばっているのではなく、お兄ちゃんになったのだという自覚
を持って、と青木くんが、自分に言い聞かせている言葉だからです。
お兄ちゃんの気持ちも知らずに、むじゃきにふるまっている妹さん
が、なんとかわいらしいことでしょう。がんばれ、お兄ちゃん！

優秀賞

すげ沼

城南小学校 五年 高橋 理貴斗

すげ沼は、まっ白だった。
きりにつつまれ
まるで雲の中にいるようだった。
前がみえなくて
ちよっと不安になった。

すげ沼は、すずしかった。
空気がひんやり冷たく
夏なのに寒いくらいだった。
ぼくは、冷そう庫の中で
冷やされているようだった。

すげ沼は、すきとおっていた。
とう明な水はガラスみたいで
沼の底までよく見えた。
小魚は見られていること知らずに
泳いでいた。
すげ沼は、どこまでも大きかった。
それなのに、しんと静かだったので、
ぼくも、だまった。

短評 優秀賞「すげ沼」

すげ沼は、奥日光にある沼です。この詩を読んで私も、二十年ほど昔、この沼のほとりに立ったことがあることを、思い出しました。けれど私には、このような詩は書けませんので、すっかり忘れていたのでした。詩を書くということは、体験の記録だけではなく、その時に受けた感動を、永遠に心に刻みつけることなのです。

小学生時代は、家族や友だちを題材にして書くことが多いのですが、このように自然の風物を題材にして、その情景が読者にも見えるように表現することは、たいへんむずかしいことなのです。高橋さんが、すげ沼の水のように、静かに澄みきった心で、沼と向い合わせたからでしょう。詩としての形式もどこのっており、とりわけ結びの一行、〈ぼくも、だまった〉には感服しました。

優秀賞

おんぷ

江川南小学校 六年 中山 由衣

おんぷはいつもおどってる
高いジャンプ、低いジャンプ
のびたりスキップをして

おんぷはいつもおどってる
一人でおどったり
二人でおどったり
何か楽しそう

おんぷはいつもおどってる
ドミミという階段で
メロディーという音楽で

そしてがくぐりとらららだらの上を

短評 優秀賞「おんぷ」

おんぷはその形から、おたまじゃくしと似たところがある、その呼吸や
れることが多いのですが、おんぷの子には見えない「下」で、
段々を、リズムカルに昇ったり降りたりしておどっている、と表
現しているところが、とても新鮮です。じつとこれがおんぷがな
るはずはな、このようにしてきな見方が出来るのは、中山さん
が、音楽的な感覚にめづまわってらららと響かせるだけな、豊かな
想像力をお持ちだからです。また、おんぷの呼吸や、その想像
力が、必要なのです。

優秀賞

視線の先にくる電車に乗って

結城東中学校 一年 上野 瑞歩

私は、今、国語の授業の真っ最中
えんぴつを走らせる音が教室に響く
何気なく 校舎の窓から校庭を見る
カーテンの隙間から
そっと窓のおくをのぞく
外の景色は
緑の木々と青い空、そして白い雲
私の心は穏やかになっていく
私の目は校庭のはるか先に…多くの家が…
電車だ、水戸線が見える
走ってゆく どこまでも
母の愛知県の実家に向かう時
電車にゆられ、窓から外を眺める
めまぐるしい風景が移りゆく
その中に
一軒一軒 家が寄りそい合うように
建っている
あの一つつに一つつの温かい家庭や
家族の団らんがあるのだ
そして、私の家も、その幸せに包まれた
一軒なのだと気づく
あの電車に再び乗る
私は、この結城に帰ってくる
「ただいま」「おかえり」

当たり前の幸せが、ここに
黒板に目をやると
たくさんの文字が黒板を埋めつくしていた
私はほんの一瞬
あの水戸線の電車に乗っていたのかも
しれない

短評 優秀賞「視線の先にくる電車に乗って」

国語の時間の真っ最中、教室には鉛筆を走らせる音が満ちています。そんな時、ふと窓の外に目をやったばかりに、居ながらにして味わった、一瞬の旅。>電車だ、水戸線が見える。あたりから、そこにはない風景が見えてきます。上野さんの心は電車を乗りついで、遠く、お母さんの実家のある愛知県のほうまで、運ばれて行くのです。一篇の詩の中に二つの場所と二つの異なる時間が書き込まれているところが、この詩の見どころです。上野さん、むしろかかったでしょ、と、書いてほめるのがいい。

優秀賞

親父の背中

結城南中学校 一年 赤岩 陸人

小さい頃めちやくちやでかかった

親父の背中

よりかかって、飛び乗っても安心

小学校高学年になってもまだでかい

親父の背中

でも親父のTシャツ着れるようになってきたかな

中学生になって、たまにつかれているときに

小さく見える親父の背中

荷物を半分持って上げよう

大人になった時、いつか俺より小さくなっちゃう親父の背中

その時は荷物を全部俺が持って上げよう

でも心の中ではいつまでもでっかい

親父の背中

短評 優秀賞「親父の背中」

さすがに中学生。お父さんを「親父おやじ」と呼び、その背中を、こんなにもあたたかい気持をこめて、眺めることができるようになったですね。お父さんの背中には、お父さんの過してこられたこれまでの人生が、にじんでいます。いたわりをこめた言葉をかけてあげたいけれど、それはちょっと照れくさい。でもこのような詩を息子の陸人くんが書いたのを「うらんならたら、お父さんは心の中で、涙をこぼされるでしょう。照れて、「じいじ」と頭をこじついたりなさりながらも。

優秀賞

真夏のショータイム

結城東中学校 三年 宮田 海

つきぬける青空 真っ白な入道雲
シリシリと照りつける太陽 炎天下

中空にうずまく不穏な黒い雲
風景が暗転し ぴゅうっと風が吹いた

それが合図

ポタン こらえきれず落ちてきた雨粒
一気に空からあふれ出す 雨 雨 雨
声を張り上げる先生 轟く雷鳴
必死に走る生徒 ぴしっと空を切り裂く稲妻
叩きつける大粒の雨 雲は雷のステージ
淀んだ空気を一掃し 雷雲退場
急激に下がる気温

突然の静寂 ハッと上げた瞳に映る
大きな二重の虹 西の空を焼きつくすあかね雲
澄み切った空気 心の中まで洗い流す雨

短評 「優秀賞」真夏のショータイム

真夏の夜空にくりひろげられる、ダイナミックな三十分ドラマ。太陽も雲も風も、空を切り裂く稲妻も雷も雨も、ひとつとして欠かすことの出来ない俳優たちです。熱情のおもむくままに一気に書き上げた台本のような詩ですが、またたく間にショータイムは終り、午後の空に静寂がやってきます。洗われた空にかかる二重の虹が美しい。

ほとんどの行が体言止め(名詞や代名詞で止める方法)で、テキパキとした表現は、じつに男性的。

優良賞

あかちゃんがうまれたよ

城西小学校 一年 山中 博人

あかちゃんがうまれたよ
さいしょは、ほいくきのなかにいたんだ
みるくをのんでおおきくなった。
おしっこをするとないて
おなかをすかせるとないて
みるくをのむとねちゃうんだ、
ぼくがちかづくと、
てとあしをばたばたふってよろこぶんだ
ぼくがあそんであげると
わらうんだ。
このあいだ、ねがえりをしたよ。
ぼくは、がんばれっておうえんしたんだ
あかちゃんてふしぎ
とつてもかわいいんだ
ぼくを、やさしいきもちにしてくれる。
みんなをしあわせにしてくれる。

優良賞

スカイツリー

絹川小学校 一年 吉田 映菜

でんしゃののってスカイツリーにいったよ
かいだんをのぼってそとにでると
めのまえにおおきなスカイツリー
こんなにちかいらあるいていけるよ
でも あるいてもあるいてもスカイツリーに
つかない
こんなにちかくにみえるのにふしぎだな
やとついたのにこんどは
たかくてうえまでみえないよ
てんぼうだいからしたをみたよ
さっきまであんなにたくさんいたひと
くるまがみえないよ
ちいさすぎてみえないんだよっておかあさん
がいつてた
またまたふしぎだな

優等賞

だんぢぢ

山川小学校 二年 海老澤 磨緒

むぎゅってしてくれたらうらうらするの
だいき
だっこしてぐるぐるしてもらうのも
だいき
足の上をわたしの足をのせて
竹うまみたいによいよいしてもらうのも
だいき
学校でさみしくなっても、
帰りにはすぐにあえるから
ぜんぜんへいきだよ
むかえにこなくても
お家の門をくぐって
「おじいちゃん。」っていえば
すぐに「はあい。」って来てくれる
パパとママにしかられても
「おじいちゃん。」ってよべば
すぐに「はあい。」って来てくれる。
教えてくれてありがとう
自てん車にものれるようになったよ
おにわにおじいちゃんがいたら
すぐに「おじいちゃん。」って
とんでいくよ
おにわのおしごとたいへんだから
おてつだいさせてね
いっしょうけんめいでも
むりはしないでね
いつもずっといっしょにいてね
おじいちゃん
大すき

優等賞

ほぐほぐ

江川南小学校 二年 鈴木 颯汰

ぼくのくつは、あるきだす
まだ先の見えない未来へ
いくつもの道を
すすんだり、もどったり
まよったり、立ちどまったり
いくつもの夢ときぼうをのせて
ぼくのくつは、はしりだす
わらったり、ないたり
おこったり、おしゃべりしながら
前にすすんで行く
たくさんの思いでをのせて
今日もあるきだす

優良賞

やもり

結城小学校 三年 岩田 彩花

毎年、ばあばの家に
夏になるとやってくる。

夜になるとまどにはりしつて
虫を食べにやってくる。

今年は、チビッコも
つれてやってきました。

わたしとばあばに
やってくるみたい

やもりは、天国のじいちゃんかな
わたしのお姉ちゃんかな

優良賞

回すと カシヤ

城西小学校 三年 浅川 玉奈

夏休み あゆみちゃんと
万げきょうを 作ったよ

小さなあなを のぞいてみると
キラキラしてるよ 大きな世かい

回すと カシヤ
赤と緑が重なって ちょうちよの羽だ

回すと カシヤ
むらさきと青で 深い海のサンゴしょう

回すと カシヤ
ひまわりやラベンダーのお花畑

次は 何かな？
回すと カシヤ…
行ってみたいな
あゆみちゃんと いっしょに

優良賞

春のおくりもの

山川小学校 三年 阿久井 美詩

きもちいい
タンポポみたいに きいろい
ポカポカした 太陽が

きもちいい
わたあめみたいに ふんわりした
あったかい 春風が

きもちいい
まっちゃんみたいな こいみじいの
ふかふかの 草原が

きもちいい
くも一つない うすい青空のような
すき通った 小川が

にじみたいに
いろんな色した
春のきもちいいおくりもの

優良賞

雲

山川小学校 四年 湯本 里奈

この雲はどこまで流れていくの
私を見た雲はいつか消えちゃうの
この雲はどこに旅しに行くの
私を見た雲は遠くのだれかが見ているの
この雲は私たちを見ているの
ねえ雲さん、私も乗せてくださいな
笑顔になる種があるのなら
あの雲の上から世界じゅうにまいて
笑顔いっぱいの花をさかせたい

優良賞

かくれんぼ

江川北小学校 四年 濱野 竜綺

コンコンコン。
草むらにかくれた。
何かが見てる。
カエルだ！
カエルに見つかった。
それからそれから、
チヨウチヨに見つかった。
バッタに見つかった。
スズメに見つかった。
いろいろな目でたくさん見られてる。
たくさんたくさん見られている。
ぼくはかくれられているのかな？
かくれんぼってむずかしい。

優良賞

真っ白

結城小学校 五年 宮田 牙香

真っ白な紙を見ると
ウキウキ、ドキドキ
お母さんと口げんかをした日
あなたはお手紙に変身
仲直りのきっかけを運んでくれる
弟と外で遊びたい日
あなたは紙飛行機に変身
楽しい時間をくれる
おばあちゃんのたん生日
あなたはかたたきけん
おばあちゃんの笑顔をくれる
お手紙・・・
紙飛行機・・・
かたたきけん・・・
わたし次第で真っ白な紙は
いろいろなものに変身
わたしのみらいもまだ真っ白
わたし次第で
どんなふうにも変身できるよね
真っ白って
ウキウキ、ドキドキだよ

優良賞

ゾエア

結城小学校 六年 秋田 翔平

ゾエアは海のか、しってるかい
みんなが泳いでいる海に
きつとどこかにひそんでる
近くにきたならば
体にチクリとはりをさす
エビはみんなしっている
だげどみんなはエビの幼体の
ゾエアをしらない
エビはしっているのに
なぜゾエアはしっている人が少ないの
ただ子どもってだけなのに
今後、海でさされても
ぼくはうれしい
なぜならその小さな存在が
そこにいと分かるのだから

優良賞

本のじぶら

結城西小学校 六年 渡部 明里

本をひらくと
わたしをいろんな世界につれていってくれる
おもしろいファンタジーの世界
ちょっとこわいホラーの世界
悲しかったこと つらかったことがあっても
本をひらくと楽しくなる
いつでもどんな時でも幸せになれる
まるで夢の中
本の声が聞こえてくる気がする
「いっしょに楽しい世界へでかけましょう
はやくわたしをひらいてください」
どんなところだろう
どんなお話だろう
わくわくする
本は今日もわたしを夢の世界へつれていってくれる

優良賞

自然の合唱

絹川小学校 六年 田村 歩久

自然は、ぼくたちに
美しい合唱を聞かせてくれる。
ほら、耳を澄ませば…

せみが鳴く音。

鳥がさえずる音。

川がせせらぐ音。

草や木が

そよ風をあびて

気持ちよさそうに

ゆれている音。

雨がザーザー降ったり

パラパラ降ったりする音。

雷がゴロゴロ鳴る音。

風がヒューヒューという音。

自然からはいろいろな音が聞こえる。

ぼくは自然の合唱を聞くと

なんだか心が落ちつく。

そして自然の豊かさを感じる。

優良賞

ゆきちゃん

江川北小学校 六年 石崎 新菜

夏なのにはだ寒い日の朝
私はゆきちゃんにさわった
フカフカフワフワ温かい

ゆきちゃんがひざの上に乗ってきた
ひざの上ではねむそうに口を開けて
鳴きながらあくびをする

白と灰色のしましまで

しっぽが長いゆきちゃん

世界で一番大切に

世界で一びきだけしかない

大好きでとてもかわいいゆきちゃん

これからもよろしくね

これからも大切にすよ

そう思ったとき

ゆきちゃんが「ニャーン」と鳴いた

優良賞

海

江川南小学校 六年 小林 千依

ザブーン、ザブーン
波がおいかけてっこしている
大きい波と小さい波がある
親子かなあ。楽しく遊んでるみたい
海はうすい水色のところ、
水色のところ、青のところ
きれいな色が次々に出ているね
海の色が青くてこいところに
船があった。ただ、ぼんやりういている
心が落ちつく、いままで悲しかったことや
つらかったことがいっきに消されるようだった。
この世界の始まりは海だったのかな？

優良賞

カフトムシ

結城中学校 一年 増田 祥太

暑いととても暑くても暑い
なぜ僕はこの季節に生まれてしまったんだ
かっこいい角黒光りの体
人間はそう言うけれど
かっこいい角は邪魔なだけ
黒光りの体は太陽の光を受ける
人間の価値観はおかしいのか
僕はこういう姿じゃない方がいい
ヘラクレスオオカブトや
コーカサスオオカブトみたいになりたい
一回でいいから冷たい樹液をなめたい
涼しい空をこの羽で飛んでみたい
でもでもでも
やっぱり自分が一番だな

優良賞

荒れる海

結城中学校 一年 望月 蛍汰

荒れた海
うねりを起こし
うねりを上げる
魚も、テトラポッドも
この海の
この一面を、
強く嫌う
風までも味方につけ
向かってくる者
寄せつけず
誰であらうと
容赦はない
止められるものなら止めてみると
うねりを起こし
うねりを上げる。

優良賞

ぼくの生まれた日

結城東中学校 一年 伊藤 大翔

我家には、今年十三年目になる宝物がある
中身は全てちがう物…
同じかな…
ほんの少しちがう物ばかり…
そうです!!
ぼくの成長の記録や
思い出が入っているのです
さあ…紹介しましょう
ぼくは、産声を上げることもなく…
仮死状態だった
初めて見るぼくは
たくさん管につながれ
保育器の中にいた
半分しか見えない顔
呼吸さえ器械の力を借りていた
今は、中学一年
大きく、翔たくようにと
「大翔」と名づけた。
本当に大きく翔たいてくれた。
人は、すごい愛情の歴史の中で
育てられ…
成長している存在である事
ずっとぼくは忘れない
いや、一生忘れないだろう…

優良賞

化石

結城東中学校 一年 鶴見 莉子

土の中でねむってる
ずっと静かにねむってる
地中の中の奥深く
何億年もねむってる
静かに静かにねむってる
誰かが見つけるその日まで
静かに静かにねむってる
ねている時はただの石
誰かに見つかるその日まで
ずっと静かにねむってる
地上にでられるその時を
ずっと夢みてねむってる

優良賞

迷路

結城東中学校 一年 西塚 美空

十三才の君、希望という光を探しに走り出す。
ずっと走り続けたら、心と体が悲鳴をあげた。
疲れたら休むといい。
立ち止まって休むといい。
前進せずに休んだら、みなぎる力がわいてきた。
少しずつ少しずつ自分の力で前を行く。
立ちほだかる困難を乗り越え、後退せずに一歩一歩前進する。
いつも走り続けなくていいんだよ。
回り道にしても、光のさす方向へきくと君は前進するだろう。
そしてきつと見つかる希望の道が。

優良賞

太陽

結城東中学校 一年 宮田 真由

いつも
天も
地も
照らしてた
けれどその日は
ちがった
動物たちは騒ぎ
人々は静まりかえった
たった五分間の
一億五千万^{km}先から
日本中に
プレセントされた
黄金のリングに

優良賞

人生の形

結城南中学校 一年 岩田 泉美

やわらかいガラスは、まだ子供
まだ形はないけれど
これからどんどん
できてゆく
それがいつしか固まって
形ができあがってゆくけれど
形ができてしまったら
もう変えることはできない
わたしも
まだやわらかいガラスだから
きれいに完成するように
今から努力をしなければ
未来が輝くように

優良賞

地球

結城中学校 二年 稲葉 太我

歩いても
走っても
地球はまわるんです。

急いでも
焦っても
明日は来るんです。

悔やんでも
悲しんでも
昨日には戻らないんです。

今日は
今日しか
ないんです。

優良賞

風は運ぶ

結城南中学校 二年 照内 裕哉

風は運ぶ、大地の祈りを
草木の子ども達を、
砂漠の願いの欠片を
風に乗せて、遠くの土地へ
ずっと、ずっと遠くの土地へ

風は運ぶ、海の歌声を
潮と波の囁きを
浮かぶ雲の涙の滴を
風に乗せて、遠くの海へ
ずっと、ずっと遠くの海へ

優良賞

緑の海

結城南中学校 二年 野村 美咲

田んぼのいね

穂がついた

まだ若い

細くて弱々しい 一本の稲

どこからか 風が吹いた

ゆれるいね

みんなが一斉に動き出す

一本では小さい けれど

一生懸命 体をゆらす

まるで波のように

田んぼが

広大で立派な海のようにだ

優良賞

「今」という幸せを

結城中学校 三年 井出 真琴

三年生の夏

あたりまえなんてないと学んだんだ

セミの声が聞こえることを

あたりまえに思っではいけないんだ

もしセミが鳴かなかったら

「夏」って実感は湧かないだろう

あたりまえなんてないんだ

いつも隣にあなたがいること

太陽のようなあなたの笑顔を見れること

空が青いということ

家族がいるということ

笑えるということ

全部…全部

あたりまえではないんだ

「一瞬」という景色や感情を

大切にしていきたいんだ

優良賞

アリから学んだこと

結城中学校 三年 野崎 絵理

じめじめした梅雨も
終わりに近づいて来た頃
ある晴れた日に
私の庭でミミズが死んでいて
アリ達がその死がいを
小分けにして運んでいた
すると数匹のアリが小さな草を持ってきて
ミミズの身体の上に乗せた
やっと手に入れたご馳走を
奪われまいと隠したのか
でもアリが運べる位の草だから
ご馳走は全く隠れなかった
アリ、全然隠れてないよ
私は心の中でそう言った
アリだって
考えながら精いっぱい生きている
なのにアリよりいろんなことができる私が
何も考えないで生きるなんてもったいない
私も精いっぱい生きよう
いろんな事に挑戦していこう
アリ達に「人間なのにね。」と
言われないように

優良賞

一期一会

結城南中学校 三年 渡邊 真由

私がもし七十五歳まで生きられるなら
あと約二万九百日しか残っていない
一日を大切にしたい
毎日新しい人に三人会えるなら
あと約六万五千七百人にしか会えない
一度の出会いを大切にしたい
三日に一度知らなかった発見をするなら
あと七千三百回しか発見できない
一回の発見を忘れないように刻みたい
こう考えると
残り少ない、時と機会。
でも、
時間はいっしょに遠ざかり
そして
記憶とともに消えていく
だから
大切にしたい
一回の出会い、発見を…

優良賞

登山靴

結城第二高等学校 二年 木村 仁美

私は今

これまでに逢ってきた人々の思いが籠もった靴をはいて
山を登っている

この靴がなかったら

険しい山をここまで登ってくることは出来なかった

まだまだ 頂上に辿り着きはしないけど

どんなに辛い道が待っていようと

この靴があれば 乗り越える事が出来るはず

これからも 人々に出逢い成長していく靴

道に迷った時には 道標となり 光差す

地を踏むたび 恩返しとなる

一時も消えることのないこの思い

ほんのり温かくなるこの心

いつか 道で集めてきた花を束ねて花束にし贈りたい

「ありがとう」と

●5周年記念 歴代新川和江賞受賞作品

第1回新川和江賞

あまいみをならしてね

山川小学校 2年(当時) え海 ひ老 さわ澤 まさ匡 き希

第2回新川和江賞

夏

結城小学校 5年(当時) むかい向 だ田 ひろ浩 や哉

第3回新川和江賞

ランドセル

結城小学校 1年(当時) の野 ろ呂 せ瀬 さ早 き紀

第4回新川和江賞

石

結城東中学校 2年(当時) ふじ藤 の野 り里 な菜

第一回 新川和江賞

あまいみをならしてね

山川小学校 二年(当時) 海老澤 匡希

わたしがそだてる、

はじめての、おやさいさん。

ミイトマトさん、こんにちは。

はじめてだからしんばいだけど、

毎日のお水あげは、わすれないよ。

わたしのうきうきな朝。

元気にそだってね、早く大きくなってね。

ちくちくして、くしゃくしゃなはっぱ

水あそびして気もちよさそうだね。

のびのびそだって、お花がさいたよ。

しモン色、ほしのかたち。

とてもきれい、わたしはワクワク。

花がくれたあと、小さな小さなまあるいみ。

すこしずつ、すこしずつ、

ふくらんで、ふくらんで、

黄みどり色の、トマトさん。

早くみんなに、食べてほしいから、

早く、赤く、赤く、なってね。

朝のお水るときは、まだ、オレンジ。

お昼には、赤くなったよ。

お日さまあびて、まっ赤だよ。

やったね。シャンプしてうきうき。

一ばん目は、パパにあげたよ。

お口の中でプチッてなったよ。

とてもあまくて、おいしいよって。

ミイトマトさん、百てんまん点。

ミイトマトさん、ありがとう。

短評 「新川和江賞」あまいみをならしてね

葉はっぱはにさわった感じかんじや、星のかたちをした花、少しずつふくらんで、色づいてゆく様子、パパにあげたさいしょの実みが、パパのお口くちの中でプチッと鳴るところまで、観察かんさつがこまやかで、表現ひょうげんが感覚的かんかくてき。作者のまなきさんはかりでなく、読者よめも、うきうきワクワクしてくる、うわしい詩です。

第二回 新川和江賞

夏

結城小学校 五年(当時) 向田 浩哉

ジージージージー
ギチギチギチギチギチ
ミンミンミンミン
ジジジジジジ
ホーイ ツクツクホーイ
ツクツクホーイ
せみがいっしょうけんめいだ
今日は晴れてて、
青い空も
いっしょうけんめいだ

短評 新川和江賞「夏」

蝉は七年間も土の中にいて、やっと地上に出て来ても、七日間のいのちしか、あたえられていません。ですからいのちの限り、せいっぱい、鳴くのですね。歯をこりするほど、さっさとけんめい鳴いてくるようすは、じつに感動的です。

この詩のすばらしさは、蝉に負けじと、夏空が、青く、深く、いっしょうけんめい晴れてくる、と表現しているところにあります。蝉の声もきまらなかった擬声語ではな、向田くんと独自の聞きかた方をしておられることが、感じました。

第三回 新川和江賞

ランドセル

結城小学校 一年(当時) 野呂瀬 早紀

くんくんすると しんぴんのおい
あたらしい おともだちができたよ
くやくて はじめて ないちゃったよ
わたしのあたらしい はじめてを
きょうじつで そつとみててくれる

くんくんすると あせのにおい
あめが ザアザアふってても
たいようが ギラギラしても
てんきのはげしい こうげきに
わたしのせなかで じつとがまんしてる

くんくんすると じいちゃんのおい
どんなにけんかしても
きらいといっても
いつも わたしのみかたをしてくれた
たくさん おんぶしてくれた
おおきな せなかにありがとう

これからは わたしのせなかでみてね
わたしのランドセルは
じいちゃんからの おへりもの

短評 新川和江賞「ランドセル」

入学祝いに、おじいちゃんがおへりてくれたランドセルは、まるでおじいちゃんそのものように、教室の中でも、おんぶちゃんを見守っていてくださいます。へわたしのあたらしい はじめてくといひゅうげんが、とてもフツツと。

心ばかりでなく、手ばかりやにおいなど、体せんたいで、おじいちゃんとのつながりが、あたたかくうたい出されていけることも、すばらしい。おじいちゃんへの、よいお返しの手紙ができてますね。

第四回 新川和江賞

石

結城東中学校 二年(当時) 藤野 里菜

全ての石を「石」と呼びけれど

石だってそれぞれ違う

流れの急な川の底でころころころ

道ばたを歩く人々にけられ、ころころころ

ころがってく場所も、形も、大きさも違う

丸いもの

角ばっているもの

小さなもの

大きなもの

中くらいなもの

色んなものがある

たくさんたくさんころがって

けずれても

欠けても

どんなに小さくなったって

色んな場所をころころころ

一生懸命ころがって他とは違うものになっていく

ころころころころ

ころころころころ

全ての石を「石」とよびけれど

石だってそれぞれ違う

流れの急な川をころころころ

道ばたを歩く人々にけられころころころ

でも、どんなにころがされたって

一生懸命ころがっていく

そうして自分だけの形になっていくんだね

短評 新川和江賞「石」

流れの急な川底で、誰にも知られず川下へところがって行く石ころや、道ばたで人にけられても、だまって痛みを耐えている石ころ。そうした地味な題材に目をとめておられる点に、感心しました。バラや百合のように華やかではありませぬけれど、石ころはその小さな体の中に、億年のいのちを秘めているのです。重くつらい詩になるところですが、〈ころころころころ〉という擬態語が、効果的に使われていて、たのしくはずんだリズムを作り出しています。私たち人間もまた、同じように鍛えられて、〈自分だけの形〉個性が作られて行くのでしょうか。同じ詩句が二箇所使われていますが、意味を強調するためで、詩だけに許される手法(書き方)です。

—新川和江氏について—

- 昭和 4 年（1929） 茨城県結城郡絹川村（現結城市）小森に生まれる。
- 昭和 19 年（1944） 詩人の西条八十氏に師事。
- 昭和 28 年（1953） 第一詩集『睡り椅子』を出版。代表的な詩集に『ローマの秋・その他』、『ひきわり麦抄』、『星のおしごと』等多数。
- 昭和 35 年（1960） 『季節の花詩集』で小学館文学賞受賞。
- 昭和 40 年（1965） 『ローマの秋・その他』で室生犀星詩人賞受賞。
- 昭和 56 年（1981） 日本現代詩人会理事長就任（～1982）。
- 昭和 58 年（1983） 女流詩人による季刊詩誌、「現代詩ラ・メール」を創刊。
日本現代詩人会会長就任（～1984）。
- 昭和 59 年（1984） 結城市市民栄誉賞受賞。「結城市民の歌」作詩。
- 昭和 62 年（1987） 『ひきわり麦抄』で現代詩人賞受賞。
- 平成 4 年（1992） 『星のおしごと』で日本童謡賞受賞。
- 平成 6 年（1994） 『潮の庭から』で丸山豊記念現代詩賞受賞。
- 平成 10 年（1998） 児童文化功労賞受賞。『けさの陽に』で詩歌文学館賞受賞。
- 平成 11 年（1999） 『はたはたと頁がめくれ…』をはじめとする全業績に藤村記念
歷程賞受賞。
- 平成 12 年（2000） 勲四等瑞宝章叙勲。『いつもどこかで』で産経児童出版文化賞
JR賞受賞。
- 平成 13 年（2001） 結城市名誉市民となる。
- 平成 16 年（2004） ゆうき図書館名誉館長就任。
- 平成 19 年（2007） 『記憶する水』で現代詩花椿賞受賞。
- 平成 20 年（2008） 『記憶する水』で丸山薫賞受賞。
結城市民情報センター及びゆうき図書館開館 5 周年記念事業
として「新川和江賞～未来をひらく詩のコンクール～」を創設。

—結城市民の歌—

新川 和江 作詞

1. おはよう結城 わたしたちの市(まち)
むらさきの筑波のみねから
太陽ののぼる市です
鬼怒川の流れのほとり
千年の昔も今も
娘らがはた織る音の
高らかにひびく市です
名にし負うつむぎのふるさと結城
2. こんにちは結城 わたしたちの市(まち)
旅びとも歴史をたずねて
おとずれる城下町です
いにしへの文化の上に
あたらしい未来をひらく
ひとびとが心寄せ合い
すこやかに暮す市です
かぎりなく伸びゆくふるさと結城
3. こんばんは結城 わたしたちの市(まち)
はつ夏はあの道この道
桐の花におう市です
桑の実にくちびる染めて
幼い日あそんだ友が
祭りには胸はずませて
遠くから帰る市です
なつかしい灯ともすふるさと結城

—新川和江賞～未来をひらく詩のコンクール～について—

[目的] 結城市出身の女流詩人新川和江氏による「詩」の創作活動の指導を通じて、結城市の文芸振興を図るとともに、積極的に未来に向かう創造性豊かな青少年の育成に寄与する。

[募集作品] 自由題の未発表詩

[応募資格] 結城市在住，在学の小・中・高校生

[選者] 新川 和江（最終選考）

関 和代

山中 和江

吉田 峰代

[経過]

- 平成 16 年 5 月（2004） 新川和江選「未来をひらく詩のコンクール」開催
（結城市制 50 周年記念及びゆうき図書館開館記念事業）
●募集作品：「私（わたくし）が大人になったら」・「私（わたくし）のふるさと」のいずれかを題材とする
●応募資格：結城市及び隣接市町村在住の小・中・高校生
●最優秀賞：『わたしのふるさと』
児矢野 千穂（三和町立大和田小学校 2 年）
- 平成 21 年 2 月（2009） 第 1 回「新川和江賞～未来をひらく詩のコンクール～」開催
（結城市民情報センター・ゆうき図書館開館 5 周年記念事業）
●新川和江賞：『あまいみをならしてね』
海老澤 匡希（山川小学校 2 年）
- 平成 22 年 2 月（2010） 第 2 回「新川和江賞～未来をひらく詩のコンクール～」開催
●新川和江賞：『夏』
向田 浩哉（結城小学校 5 年）
- 平成 23 年 2 月（2011） 第 3 回「新川和江賞～未来をひらく詩のコンクール～」開催
●新川和江賞：『ランドセル』
野呂瀬 早紀（結城小学校 1 年）
- 平成 24 年 2 月（2012） 第 4 回「新川和江賞～未来をひらく詩のコンクール～」開催
●新川和江賞：『石』
藤野 里菜（結城東中学校 2 年）

春

新川和江

花はなのみちを

人びとの心を

こぼさずいまは

こいぬいよいよみあげてゆきます

小枝の先の

いじけた葉^{つばき}はひらきまして

「あいらとえぬいかにくしも

竹^{たけ}えなればと想^{おも}ひにまよ

花の名

新川和江

もも

ゆきやなぎ

みつばつつじー

花の名をいうときには

この春やつと

ひらがなを覚おぼえたちいさな妹が

やわらかな鉛筆えんぴつで

一字書いては

うれしげににっこりするように

わたしは発音はつおんするのです

やはり ひらがなで

えにしだ

こぶし はなみずき

そして わくら……

